

## 令和2年度 学校教育自己診断分析

### 生徒対象教育自己診断

- ・今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、体育祭、文化祭といった自治会行事や国際交流行事、地域連携行事が中止、または縮小されることとなったため、経年変化を見る対象として不適と判断し、設問から除外することとした。結果、**26項目中17項目(65%)**において肯定率が増加した。**教職員集団による日頃の教育活動の成果**であり、学校として嬉しい結果である。特に、授業における満足度が大きく増加したことについては、**授業改革に向けた教員個人の研鑽**はもとより、授業力向上等検討委員会を軸とする**組織的取組みの推進**が生徒の満足度に繋がっていると思われる。学習指導要領の改訂、あるいは国の「GIGAスクール構想」による1人1台端末を活用した教育が始まろうとしているなか、引き続き、生徒にとって必要な力の模索、そしてその力をつけるための効果的な教授法をテーマにした組織的研鑽が必要である。
- ・「先生は協力して生徒指導にあたっている」(76.2%) < (H30 72.6% R1 74.2%) >、「生活規律や学習規律などの基本的習慣の確立に力を入れている」(72.3%) < (H30 68.8% R1 70.0%) >と、**生徒指導に関する肯定率は2年連続で向上した**。日頃から、先生方が一枚岩となりながら丁寧に指導をしている姿、そして生徒の成長を願う思いが生徒にも伝わっていることが伺える。
- ・「将来の進路や生き方について考える機会がある」(85.3%) < (H30 78.1% R1 78.7%) >、「進路についての情報を知らせてくれる」(87.8%) < (H30 79.1% R1 83.7%) >と**キャリア教育に関する肯定率も2年連続で向上した**。**進路指導部、担任が窓口となりながら、丁寧かつ適切な指導を行っている結果**と言える。今後も、HRや探究の時間を活用し、自己実現に向けたサポートを充実していく必要がある。
- ・「部活動に積極的に取り組んでいる」(78.9%) < H30 78.7% R1 79.4% >が、わずかながらも減少したのは、コロナ感染症の影響であると考えられる。
- ・「人権について学ぶ機会がある」(85.2%) < (H30 69.2% R1 77.6%) >は**2年連続大幅に向上した**。生徒全てが安全で安心した学校生活を送ることはもとより、今後ますます進むグローバル化や高齢化などの社会の変化を生きる力を育成するためには、「自己肯定・他者理解」両面からの人権教育は必要不可欠である。「部落差別問題」などの不易の課題から、「性的マイノリティー」などといった日々情報がリニューアルされるような課題まで、多岐にわたる人権教育をおこなっていくことは高校教育の根幹のひとつである。本校における**人権教育の充実、ならびに教職員集団の人権感覚(カウンセリングマインド)の向上**が、「学校では挨拶が自然に交わされている」(78.5%) < (H30 68.3% R1 71.2%) >、「先生は、いじめや相談事について私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」(79.1%) < (H30 69.5% R1 71.1%) >といった**生徒の安全で安心な学校生活**に関する肯定率向上に繋がっている。
- ・「他の先生が授業を見に来ることがある」(66.9%) < (H30 73.2% R1 80.8%) >が減少したのは、今年度授業観察の方法を重点化(テーマを設定し、一部の研究授業を見学する)したためである。教育改革が進む中においては、テーマを絞った研修が求められる。今後も、より効果的な方法で実施することを模索する必要がある。

#### <今後の課題として>

- ・「授業でわからないことについて、先生に質問しやすい」(66.0%) <H30 65.8% R1 69.6%>が、昨年度から3.6ポイント減少した。コロナ感染症の影響もあると考えられるが、今後 Google Classroom を活用するなど、**生徒がわからないところを質問しやすい場面の創出**が課題である。
- ・「担任の先生以外に相談することができる先生がいる」(54.7%) <H30 57.6% R1 62.2%>は、昨年度から7.5ポイント減少した。生徒の多様化が進むなかにおいて、**生徒相談体制の充実**は大きな課題である。担任団、教育相談委員会を軸に、さらなる体制の充実が求められる。

#### 保護者対象教育自己診断

- ・生徒同様、学校行事、地域連携についての項目を削除する形で実施をした。概ね、例年と変わらない結果であった。2年間の経年比較と言う観点からの考察では、昨年度芳しくなかった評価結果が一昨年度並みにV字回復をしたという感じである。
- ・「子どもは**桜塚高校に行くのを楽しみ**にしている」(81.1%) <R1 84.8%>、「桜塚高校の**部活動は活発**だと思う」(80.4%) <R1 83.2%>、「桜塚高校の**いろんな教育活動を通して子どもの成長**を実感できる」(75.4%) <R1 77.1%>が、昨年度より**3~4%減少**したのは、**新型コロナウイルス感染症が少なからず影響**しているものと思われる。
- ・「子どもが**授業がわかりやすい**と言っている」(61.2%) <R1 50.6%>が昨年度より10.6ポイント増加した。6割強という肯定率については、まだまだ向上が望まれるところではあるが、教職員の元気に繋がる結果と言える。日頃の**教員の研鑽が生徒を通じて保護者に伝わったもの**と思われる。
- ・「桜塚高校では、**生徒に対するプライバシーや人権が守られている**」(91.3%) <R1 91.5%>は、今年も高い肯定率を示した。**教育活動における基盤**であり、引き続き、組織として徹底する必要がある。
- ・「桜塚高校が保護者に出す**文書・事務連絡等は適切である**」(89.6%) <R1 88.0%>は、ここ数年9割弱と言う高い肯定率を示している。今後、保護者連絡用ライデン一斉メール配信システムに加えて、Google Classroom を活用し、さらに保護者との繋がりを強化するとともに、ペーパーレス化も推進していきたい。

#### <今後の課題として>

- ・「桜塚高校には他の学校にない良さ(特色)がある」(68.6%) <H30 78.2% R1 73.6%>の肯定率が2年間で10%も減少した。後述する教職員自己診断においても同様に減少している。今後、ますます進む少子化を考えると**学校の特色づくりは喫緊かつ重要な課題**である。「魅力あるカリキュラム」、「活発な行事・部活動」、「地域連携の深化」、「国際交流活動」などを通して、さらなる本校の魅力アップを進めていく必要がある。
- ・「子どもは、家庭でよく話をする」(72.7%) <R1 80.7%>、「子どもの様子は、よく把握している」(77.1%) <R1 83.1%>の2項目が、2年連続で減少している。このことが、保護者の「**学校を通じて子どもの様子を知りたい**」というニーズの高まりに繋がることが十分に考えられる。また、学校からの発信についても、生徒を通してはなかなか難しい状況であるため、**重要な連絡をおこなう際には、確実に保護者に届ける手段**を模索する必要があると思われる。
- ・最も低かったのは「桜塚高校の**施設・設備は学習環境の面で満足**できる」(55.6%) <R1 45.4%>の肯定率であった。トイレ等の老朽化は致し方ないものの、学習環境の面から言えば「**ネット環境の充実**」という課題がある。現在行っている Wi-Fi 環境の増強等でどのように改善されるかが大きな要素である。

## 教職員対象教育自己診断

母数が少ないため、有意な差が何ポイント以上であるかの判断が難しいが、2年連続で増加または減少した項目、および今年度大きく増減した項目（5ポイント以上）を中心に総括する。

- ・「各教科において、教材の精選・工夫をおこなっている」（97.9%）については、例年高い数字を示していたが、今年度は極めて高い値であった。今後、教育改革が進む中において大変重要なポイントである。
- ・「生徒の問題行動が起きた時、組織的に対応する体制が整っている」（89.3%）＜（H30 70% R1 78.9%）＞は2年間で20%と大きく増加した。また、「生徒指導において家庭と緊密な連携ができています」（93.6%）についても、昨年度より7%増加した。**生徒指導課題が年々複雑化・多様化する状況の中において、組織的対応の推進、保護者との連携、専門家や外部機関との連携等はとても大切な観点であり、この項目の肯定率が向上したことは、本校生徒指導力がアップしていることを示している**と考える。
- ・「教育相談体制が整備されており、生徒は学級担任以外の教職員とも相談することができる」（93.7%）、  
「いじめが起こった際の体制が整っており、迅速に対応することができる」（95.8%）の項目が昨年度から大きく向上した。**教職員のカウンセリングマインドの向上はもとより、組織的対応が進んでいること**を表している。今年度から新たに設置した「いじめ対応委員会」は、いじめの早期対応に機能を果たした。今後も、**ネットワーク・フットワーク・チームワーク溢れる組織により、生徒が安心して学校生活を送ることのできる学校づくりを進めていく必要がある。**
- ・「本校の校内研修は、質・量ともに充実している」（70.9%）は、昨年度比11%アップ、一昨年度からは22%も増加した。**研修は、負担＜効果（満足感）が実感できるものでなければならない。**今後も内容を精選しながら「為になった」、「今後活かせる」といった研修を進めていくことが大切である。
- ・「各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している」（74.5%）は、2年連続で大きく向上した。今後、学校が抱える課題の複雑多様化や新陳代謝が進む中、「**オール学校**」での**課題解決や改革**をおこなっていく必要がある。今後も、**教科や分掌を横断した組織力アップ**に向け、**首席が軸となりながら、風通しの良い職場環境を整えていくことが大切である。**

### <今後の課題として>

- ・保護者同様、「本校の教育活動には、他の学校に無い特色がある」（72.9%）が大きく減少した（昨年度比11.8%減）。上記した通り、ますます進む少子化を考えると**学校の特色づくりは喫緊かつ重要な課題**である。『「中学生・保護者」、「在校生・保護者」にとって、魅力ある学校づくり』に向け、今後も「**オール桜塚**」の体制で**マンパワーを結集し、邁進していかなければならない。**
- ・「年間の学習指導計画について、各教科で話し合っている」（70.9%）は今年度大きく（昨年度比—11%）減少した。教育改革が進む中、**指導計画の策定、それに基づく教科内での情報共有や相互研鑽など、教科のメンバーが一丸となった教科教育が求められる。**普段から、**コミュニケーションをしっかりと取り、教科としてのベクトルをしっかりと定めていくことが大切である。**
- ・「学校行事が生徒にとって魅力あるものとなるよう、工夫・改善を行っている」（86.9%）、「大学などとの校種間連携の機会を設け、教育活動全般に生かしている」（70.2%）、が減少したのは、**新型コロナウイルス感染症の影響**であると考えられる。しかし、なかなか緊急事態の収束が見えない中、**来年度に向けた対策は早期に考えておかななければならない。**